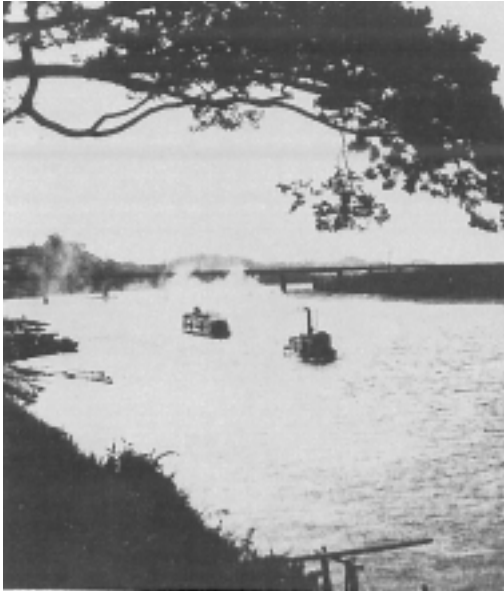


第2章 歴史と文化



那珂川を往き交う蒸気船

(那珂川常磐線鉄橋付近 - 大正初期)

『写真記録 茨城 20 世紀』

那珂川では、明治 10 年代から大正年代末期まで蒸気船が運行していた。写真は湊町小川(ひたちなか市)～杉山下(水戸市)を運行する那珂川汽船の様子。



伝統漁法 - 那珂川の大瀬観光^{やな}築(茂木町)

1 川と人々との関わり

那珂川流域には、流域の人々の生活・文化の礎となってきた川と人々の暮らしの歴史を物語る遺跡、水利施設や地域文化など、現代に受け継がれた歴史的遺産をみることができ

(1) 那珂川の名の由来

那珂川の名の由来は明らかではないが、古い記録として、『常陸国風土記』に、「郡より東北、粟河を挟みて駅家を置けり」「途中数里の間を、那珂郡阿波郷を通過することによってか、粟河」と記され、上流に阿波郷があったことからこの名で呼ばれているとされる。室町時代の『神明境』に「応永十五年（1408）正月十八日、野州那須山焼崩、硫黄空ヨリ降、常州那珂河硫黄二変ズ」とあり、この頃は那珂川の名が用いられている。なお、連歌で知られる宗祇（1421～1502）が、応仁2年（1468）の『白河紀行』の中に、川について村人に「名を問い侍れば、中川という」と語るとあり、中川の字をあてている（参考：『日本地名大辞典（茨城県）』、『茨城の歴史をゆく 続』）

(2) 流域の歴史概要

原始時代の那珂川流域

a. 旧石器遺跡

旧石器時代の遺跡は上流の栃木県側に多く見られ、関東ローム層の赤土の中から出土する石器類から1万年以前の当時の人々の生活の様子がうかがえる。上流では逃室（那須町）や那須烏山市の那珂川が大きく蛇行する場所に突き出した河岸段丘上に宮原遺跡等がある。下流では水戸市赤塚遺跡、ひたちなか市原山遺跡、後野遺跡などがある。特に後野遺跡はこの時代の最終期に位置する細石器を多量に出土し、茨城県を代表する旧石器時代遺跡として知られている。

b. 縄文遺跡

温暖化が進み、海進によって台地の裾部に入り江が出来た紀元前数千年から前1～2世紀の頃、台地縁辺部に住んで、海の幸を採取し土器を使った生活の様子である貝塚が那珂川下流の両岸の台地端に出土している。水戸市元吉田、谷田、大串、ひたちなか市三反田等の貝塚があり、縄文時代の生活・海進の様子がうかがえる。

c. 弥生遺跡

西方から稲作が伝わった3世紀以前の弥生時代の遺跡は、茨城県の常陸大宮市、ひたちなか市、大洗町等でみられる。中でも小野天神前遺跡（常陸大宮市）、東中根遺跡（ひたちなか市）、髭釜遺跡（大洗町）が知られている。那珂川沿いの柳河小学校（水戸市）では土器や住居跡がみつかり、この地域での農耕生活の始まりを知ることができる。（『那珂川その流域に関する歴史地理的考察』『茨城県の歴史』『茨城県史』等）

おおくし
大串貝塚（茨城県水戸市）

酒沼川を望む東茨城台地の先端に位置する縄文時代前期の貝塚。昭和11年、同18年の発掘調査で、シジミを主体に、土器、石器、骨角器類の他魚貝類、獣骨等が出土した。「常陸国風土記」には、「平津ノ駅家ノ西一二里南ニアリ。名ヲ大櫛トイフ。上古二人アリ、体極メテ長大キニ身八丘壟ノ上ニ居リテ、^{ウムギ}麩ヲ採リテ食イキ。ソノ食エル貝、積聚リテ岡ト成リキ云々」と記され、巨人伝説とともに文献に残る貝塚としてはわが国で最も古く、国指定史跡にもなっている。



(平成18年2月)

図2-1 大串貝塚（水戸市）

古代・中世の那珂川流域

a. 古代

大和を中心に発生した古墳文化は那珂川流域にも及んだ。那珂川中流域の那珂川町（旧小川町）から大田原市（旧湯津上村）にかけての右岸段丘上には、古墳時代前期（4世紀代）に築造された^{こまがたおおつか}駒方大塚古墳（国指定史跡・那珂川町）や^{かみ しもさむらいづか}上・下侍塚古墳（国指定史跡・大田原市）等のこの地方の特色でもある前方後方墳や方墳が多く分布している。下流部には古墳時代後期（6・7世紀）の^{あたごやま}愛宕山古墳（国指定史跡・水戸市）がある。また、左岸には装飾古墳の^{とらづか}虎塚古墳（国指定史跡・ひたちなか市）、その近くには300以上の横穴墓をもつ^{じゅうごろうあなよこあなくん}十五郎穴横穴群（県指定史跡・ひたちなか市）、^{まわたり}馬渡には、学術的に貴重な^{まわたりはにわ}馬渡埴輪遺跡（国指定史跡・ひたちなか市）等がある。これらの古墳は那珂川などの河川交通・湖上交通の要所に位置していた。

また、那珂川の流路が大きく変化する右岸の^{わたり}渡里（水戸市）には奈良・平安時代のものでいわゆる^{たいわたりはいし}台渡里廃寺跡があり、古墳群、横穴墓群、寺院跡、城館跡が発見されている。この廃寺跡は長者山・観音堂山、南方地区からなり「東国の初期寺院の中でも異彩を放つ極めて重要な史跡」（台渡里廃寺跡2005、水戸市教育委員会）である。

そのころ那珂川上流部には「^{なすのくにのみやつこ}那須国造*」、下流部には「^{なかのくにのみやつこ}仲国造」が置かれており、大化改新(645年)以後那珂川流域は下野国、常陸国となり、それぞれの国内を郡に分けて^{くんが}郡衛**（郡家）が置かれた。那珂川と^{ほうきがわ}篝川の合流点付近の^{うめぞ}梅曾（那珂川町）に那須郡の郡衛跡がある。下流那珂川右岸の長者山（水戸市）も那珂郡の郡衛跡ともいわれる。なお、この近くの段丘崖斜面の^{うっそう}鬱蒼と木々の茂る滝坂に万葉集（巻九）にも詠まれた「^{さらしい}曝井」（湧水）がある。「三栗の那賀に向える曝井の絶えず通はむ彼所に妻もが」（那賀に向き合う曝井の水が絶えないように、絶えず通いたいものだ。そこに妻がいてくれたらなあ）とある。（『那須の歴史と文化』『那珂川と八溝の古代文化を歩く』『那須の歴史と文化』『茨城県の歴史』『茨城県史』等）

* ^{くにのみやつこ} 国造

古代大和朝廷から任命された地方（国）の長。その地方を統治した地方豪族が任命されていた。大化の改新（645）後は廃止された

** ^{くんが} 郡衛

古代律令制下に設置された地方（郡）の役所

虎塚古墳（茨城県ひたちなか市）

7世紀前半築造とされる全長 56.5m，後円部径 38.5m，前方部幅 38.5mの前方後円墳。前方部に軟質凝灰岩で造られた横穴式石室があり，その奥壁と東，西側の三面の壁面に華麗な幾何学的な模様が描かれている彩色壁画古墳である。昭和 48 年（1973）この壁画のある横穴式石室が発見され話題となった。昭和 49 年（1974）1月に国の史跡指定を受ける。



（写真：ひたちなか市教育委員会）

図 2-2 虎塚古墳の横穴式石室に描かれた壁画

上侍塚古墳・下侍塚古墳（栃木県大田原市）

4世紀後半から5世紀の前方後方墳で、いずれも那珂川に沿った河岸段丘上に前方部を南に向けて造られている。那珂川流域では規模も大きく、国指定の史跡となっている



（写真：磯 忍氏，平成 17 年 6 月）



（『栃木の古墳』）

図 2-3 下侍塚古墳（左）とその平面図（右）〔大田原市（旧湯津上村）〕

那須国造碑（栃木県大田原市）

笠石神社に那須国造碑が祀られている。この碑は、群馬県の多胡碑、宮城県の多賀城碑とともに日本三古碑のひとつに数えられている。延宝 4 年（1676），磐城の旅僧円順が草むらのなかで苔におおわれた石碑を発見，それを水戸光圀が佐々木宗淳らに命じて調査にあたらせ，さや堂（風雨から守るため外側に覆う建物）をつくって納めた。碑文の冒頭 3 行は本碑建立の由来を記している。この碑は管理する笠石神社の御神体として祀られ，国宝に指定されている。



（大田原市湯津上 平成 17 年 7 月）



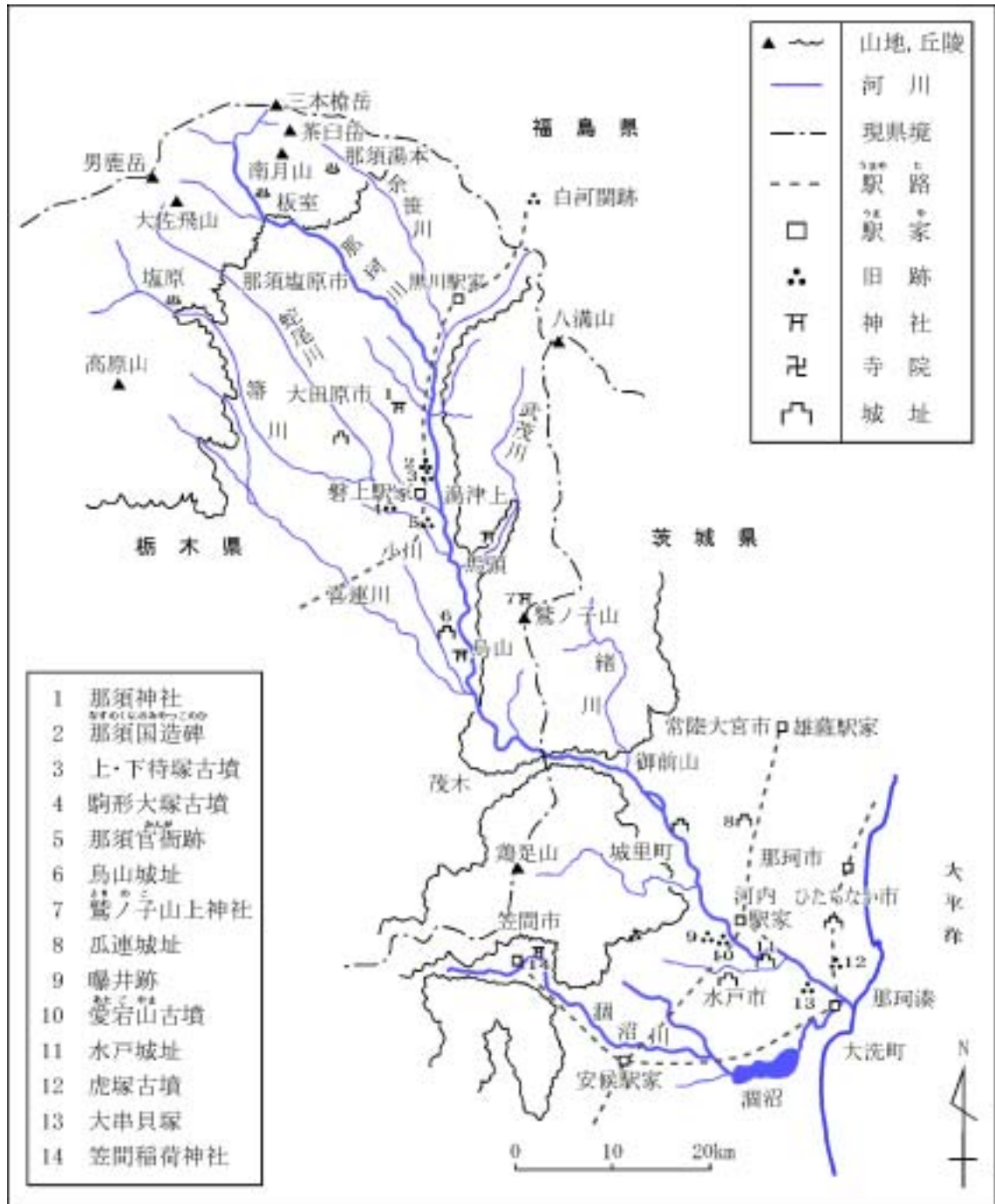
（写真：『大田原市 HP』）

図 2-4 笠石神社（左）と那須国造碑（右）

b. 中世

8世紀半ば以降になると律令制度の崩壊で荘園が増大し、豪族、武士が台頭してくる。平安時代末期～鎌倉・室町時代、那珂川上、中流部には那須氏、下流郡の常陸北部には大掾氏、佐竹氏、江戸氏があり、いずれも源氏、平氏、藤原氏の末裔でこの地に土着したものである。14世紀半ばの南北朝争乱でこれら諸氏も抗争にまき込まれ内乱の様相を示した。

那須氏の所領であった那珂川上流地域では、戦国時代には烏山の那須宗家を筆頭に、黒羽の大関氏、大田原の大田原氏、佐久山（大田原市）の福原氏、芦野（那須町）の芦野氏、伊王野（那須町）の伊王野氏、茂木（茂木町）の千本氏的那須七騎といわれた那須衆が興



（『那珂川その流域に関する歴史地理的考察』に加筆）

図 2-5 那珂川流域の古代～中世の主な歴史的遺産（史跡）分布図

った。なお、那須与一宗隆は源平合戦屋島の戦で扇の的を射落とし、後世に名を残している。

下流地域では右岸の宇木(浮)郷の台地先端(現茨城県立水戸第一高等学校の場所)に、大掾氏の一族馬場資幹が建保4年(1193)に馬場城(のち水戸城)と称して居館を構えた。以後200余年大掾氏が当地域を治めた。応永33年(1426)に江戸通房が大掾氏を攻め、以後約160年間江戸氏の居館となった。大掾氏はその後、府中城(現石岡市)に居を構えた。天正18年(1590)には佐竹義宣が江戸氏および府中城の大掾氏を攻めて領地を支配下に治めた。その結果、平国香以来の平家一族大掾氏は滅亡した。

近世的那珂川流域

a. 上流地域

中世に那珂川上流を統治した那須衆のうち、江戸時代にも領地を存続したのは、豊臣秀吉の小田原攻めに加勢し、関ヶ原の戦いで徳川家康に味方した大関氏と大田原氏だけであった。

黒羽城は天正4年(1576)那須七騎の一翼であった大関高増が那珂川左岸の台地上に築城し、明治初年まで続いた大関氏歴代の居城であった。黒羽は明暦元年(1655)那珂川の舟運が開かれ、那珂川遡行の終点として栄えた。上河岸、下河岸、矢倉河岸があり、下流の水戸、那珂湊との物資の交流がおこなわれ栄えた。また黒羽は、松尾芭蕉の「奥の細道」の行程箇所として知られる。

b. 下流の常陸地方と水戸藩

下流地域を支配した佐竹氏は、関ヶ原戦後の慶長7年(1602)減封の上、秋田に国替となって、下流域一帯は水戸徳川家(水戸藩)支配地となった。

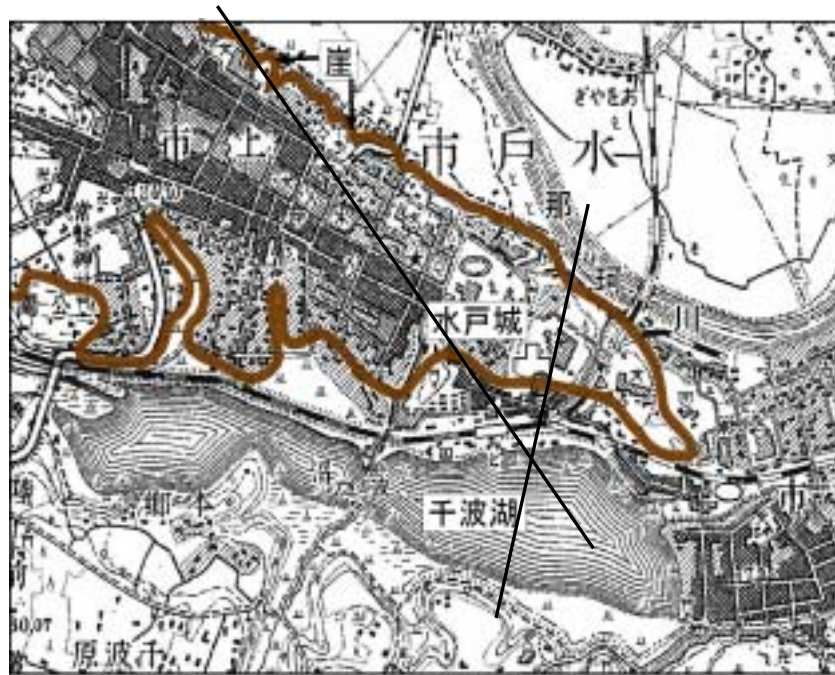
慶長7年(1602)11月、家康は佐倉城主の第5子武田信吉を藩主に封じたが、信吉の病死により同8年11月に第10子徳川頼宣を封じ、その後頼宣は駿河に移封になり、慶長14年(1609)12月に第11子徳川頼房(当時7歳)を下妻から水戸へ移した。これより頼房を水戸藩25万石の初代藩主として、明治4年(1871)の廃藩置県まで約260年の間、徳川御三家の一つとして続くことになる。藩では水戸城の拡充と水戸城下の整備を進めると共に、舟運の発達、かんがい水路の開発を背景に那珂川沿岸の開発も進めていった。

水戸城は北側を那珂川に、南側を桜川が堰き止められて出来た千波湖に挟まれた台地の東端に作られた。城下町は城郭の西に続く洪積台地上の上町と那珂川と千波湖に挟まれた沖積低地の下町からなる。寛文年間(1661~1673)の水戸城下の市街地の状況を図2-の

およびの線に沿って断面図として示すと、水戸城は台地上にあり、北側の那珂川低地に武家屋敷、御材木屋が、南の千波湖の低地に武家屋敷、御馬屋が配置されたことがわかる。一方、西側台地上には武家屋敷と町屋敷が配置された。



図2-6 近世那珂川流域の藩領(天保年間)



(大正4年測量地形図に加筆)

図2-7 自然の要害水戸城

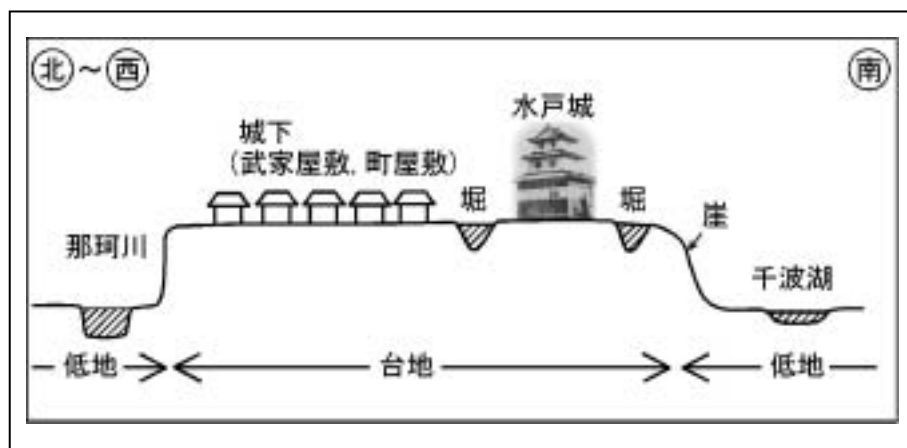


図2-7 点線部の断面概略図

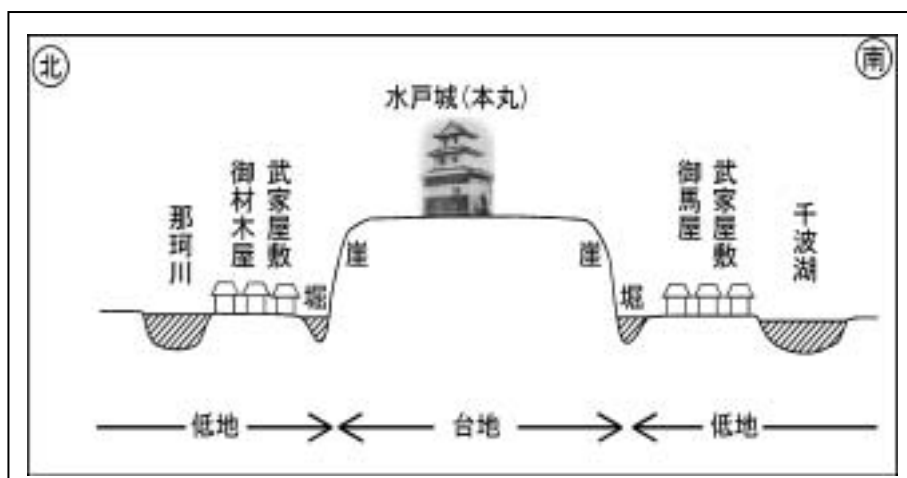


図2-7 点線部の断面概略

(図2-7点線部 上図, 下図の断面概略 『水戸市史』をもとに作成)

図2-8 水戸城位置概略図(寛文年間)